

# JUGEND PHIL; 13

## NIELSEN, KODÁLY & SIBELIUS

ユーゲント・フィルハーモニカー 第13回 定期演奏会

## ごあいさつ

本日は、ユーゲント・フィルハーモニカー第13回定期演奏会に足をお運びいただき、誠にありがとうございます。ごさいます。

ユーゲントフィル今期の活動のハイライトとしては、当団創設のきっかけの1つとなった、全日本高等学校オーケストラ連盟主催の選抜オーケストラフェスタに、第25回記念OBOGオーケストラのコア団体として出演したことが挙げられます。脈々と続く高校オーケストラの素晴らしい演奏に触れ、我々の活動の原点を再確認することが出来た1年となりました。これからも若き日々の情熱を忘れることなく、ユーゲントフィルらしい充実した活動を展開していければと考えております。

さて本日は、6度目の共演となります三河正典先生の指揮のもと、当団の定期公演では初めて取り上げるニールセン、コダーイ、シベリウスの3人の作曲家の作品を演奏いたします。比較的演奏の機会が少ない曲目が並び、ユーゲントフィルにとっても新たな挑戦となりますが、お客様に作品の魅力をお伝えできますよう、団員一同鋭意練習を重ねて参りました。お楽しみいただければ幸いです。

最後になりますが、今回ご指導いただきました三河先生、ソリストの菅谷さん、平中さんをはじめ、演奏会にお力添えいただいた皆様、そしてご来場いただいた皆様に厚く御礼を申し上げます。今後とも当団の活動に対してご愛顧を賜りますよう、どうぞよろしくお願ひします。

ユーゲント・フィルハーモニカー 代表 湯田 怜央奈

## プログラム

---

### C. ニールセン：交響曲第3番 《広がりの交響曲》 二短調 作品27

ソプラノ = 平中麻貴

バリトン = 菅谷公博

### Z. コダーイ：ハンガリー民謡 《孔雀は飛んだ》 による変奏曲

— 休 憩 —

### J. シベリウス：交響曲第5番 変ホ長調 作品82

指揮 = 三河正典

---

開演中は携帯電話の電源をお切りください。

他のお客様のご迷惑となりますので、演奏中のお席の移動はご遠慮ください。

未就学児をお連れのお客様は、親子鑑賞室にてご観覧ください。

〈指揮〉

## 三河正典

東京藝術大学作曲科および指揮科に学んだのち、パリ・エコール・ノルマル音楽院に留学、満場一致の首席で卒業。作曲を北村昭、佐藤眞、近藤譲、池野成の各氏に、指揮を小林研一郎、松尾葉子、秋山和慶、河地良智、ドミニク・ルイツの各氏に師事。さらに、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチの元で研鑽を積む。第4回ブルー・ダニューブ国際オペラ指揮コンクール第4位、審査員特別賞受賞。ブルガス歌劇場（ブルガリア）にてヴェルディ作曲《椿姫》を指揮。これまでに日本フィルハーモニー交響楽団、読売日本交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、京都市交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、群馬交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、サンクトペテルブルグ交響楽団、ロシア・トムスクフィルハーモニー交響楽団、サンクトペテルブルグ・カルペ・ディエム室内管弦楽団、パザルジク交響楽団（ブルガリア）、浙江交響楽団（中国）、小田原フィルハーモニー交響楽団、湘南弦楽合奏団、ヴォーチェ・ソナーレ（合唱）など、国内外のオーケストラ、合唱団を指揮するほか、新国立劇場、二期会をはじめとするオペラ公演や、サイトウキネンフェスティバル、アルゲリッチ音楽祭などで合唱指揮者、アシスタントコンダクターとしても活動している。現在、東京藝術大学および東京音楽大学、同大学院指揮科、声楽科（オペラ）講師を務め、後進の指導にもあたっている。ユーグント・フィルには2013年から第7、8、9、11、12回定期演奏会に客演。今回で6度目の共演となる。



〈ソプラノ〉

## 平中麻貴



愛媛県立松山東高等学校、東京藝術大学音楽学部声楽科卒業、同大学院修士課程独唱科修了。学部在籍中から学内、学外問わず数多くのコンサートに出演。これまでに、ベートーヴェン《第九》ソプラノソロを務めるほか、オペラは《フィガロの結婚》スザンナ、ケルビーノ、《ドン・ジョヴァンニ》ツェルリーナ、《魔笛》夜の女王、《愛の妙薬》アディーナ、《ジャンニ・スキッキ》ラウレッタ等を演じる。第24回市川市文化振興財団新人演奏家コンクール声楽部門最優秀賞受賞。日本声楽家協会講師。女声合唱団リベラ、コーロポポラーレ指導者、女声合唱団メルヴォイストレーナー。日本声楽アカデミー会員。聖徳大学附属女子高等学校講師。聖徳大学音楽学部講師。うえのアニマルアンサンブルメンバー。

〈バリトン〉

## 菅谷公博



千葉県茂原市出身。東京藝術大学声楽科卒業。アカンサス音楽賞・同声会賞受賞。桐朋学園大学研究科修了。ドイツ国立カールスルーエ音楽大学大学院声楽科修了。オペラではモーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》騎士長、《フィガロの結婚》フィガロ、プッチーニ《ラ・ボエーム》ショナール役を、コンサートではJ.S.バハ《ミサ曲口短調》《マタイ受難曲》、ヘンデル《メサイア》、ベートーヴェン《第九》、モーツァルト《レクイエム》、ハイドン《天地創造》などのソリストを務める。第21回市川市新人演奏家コンクール優秀賞。第15回コンセール・マロニエ第3位。第25回友愛ドイツリートコンクール入選。もばら少年少女合唱団、クール・アンシャンテ、ギフトミュージックアカデミー、ミック松濤アンサンブルにて指導にあたる。桐朋学園大学嘱託演奏員。うえのアニマルアンサンブルメンバー。

# 曲紹介

近づく戦禍を遠ざけて、遠のく祖国の自然を近くに聴く——

今回ユーゲントフィルが挑むプログラムのテーマは「自然賛歌」である。取り上げる作曲家はデンマークのニールセン、ハンガリーのコダーイ、そしてフィンランドのシベリウスと、いずれも中央ヨーロッパから離れた地域の出身だ。

彼ら3人は共通項がある。ほぼ自国内のみで作曲を続けたため、国外への露出は少なかったにも関わらず、今日では世界的な名声を勝ち得ていることだ。その背景には「国民的作曲家」の誕生を切望する国民の願いがあった。第一次あるいは第二次大戦下において、ドイツをはじめとする列強国から理不尽な条約を突きつけられていた各国は、政治経済とともに、文化においても列強に対抗せんと息巻いていた。こうしたナショナリズムの高まりは作曲家を勇気づけた。

## C. ニールセン (1865-1931) : 交響曲第3番《広がりの交響曲》ニ短調 作品27

---

カール・ニールセンは、24歳で王立劇場楽団のヴァイオリン奏者として入団し、また同年から交響曲の作曲に着手する。演奏、作曲ともに順調な活動を重ね、43歳で王立劇場の楽長に就任し、その3年後の46歳、指揮活動が多忙を極める中で作曲されたのがこの交響曲第3番である。

副題の「広がり」は、第1楽章の発想記号 *Allegro espansivo* からきている。交響曲における伝統的な4楽章形式を採用しているものの、その内容は相当に独特だ。例えば、両端楽章の1楽章や4楽章においてはソナタ形式が採用されているものの、転調を重ね、原型を留めないくらいフレーズが展開されていく様はニールセン独自の書法となっている。コントラバスも含めた弦楽器の総ユニゾンが奏でられると同時に、金管楽器が執拗にリズムを打ちつけていくオーケストレーションもあまり類を見ない。

最も特徴的なのが2楽章で加えられるソプラノとバリトンの二重唱であろう。それも歌詞を伴うのではなく、「A」の発音による単純なヴォカリーズである。声楽を器乐的に扱う効果は非常に印象的で、むしろこの2楽章の牧歌的雰囲気こそが「広がり」の名にふさわしいとすら感じられる。

## Z. コダーイ (1882-1967) : ハンガリー民謡《孔雀は飛んだ》による変奏曲

---

20世紀初頭、ハンガリー音楽は欧州中で人気を博していた反面、「静と動の対比が激しいキャッチーな音楽」という誤解が蔓延していた。実際のハンガリー民謡はそんな単純な形式ではなく、リズムや旋

法の面でもっと複雑な要素を孕んでいた。ゾルターン・コダーイはその誤解を解くべく、民謡採集に血道を上げ、かつ国内外にその成果を発表し続けた。

本作品の主題となっている民謡「孔雀は飛んだ」であるが、まず1936年に合唱曲として発表され、ついで1939年、オランダのコンセルトヘボウ管弦楽団の50周年記念作品としてこの管弦楽変奏曲が作曲された。

歌詞は『飛べよ孔雀 役場の上まで多くの貧しい若者を救済するため』という、ナチスドイツからの解放を乞い願う、ハンガリー国民の心情を代弁したかのような内容で、旋律も民謡風の五音階である。曲は主題の提示と、16の変奏、そして終曲より構成される。民族的意識と卓越した管弦楽法が高度に融合しており、こと要所で展開される木管楽器の超絶技巧が豪華絢爛な雰囲気さをさらに盛り立てている。

## J. シベリウス (1865-1957) : 交響曲第5番 変ホ長調 作品82

---

本作品の作曲が開始された1914年の秋、シベリウスの日記にはこう記されている。「深い谷間にいる。おぼろげながら登る山が見えてきた。するとその時、神がその扉を開いて、神のオーケストラが演奏する.....交響曲のアダージョ、現世、苦悩、魂が歌う狂喜.....」

27歳のデビュー当時から国民的作曲家の地位を築き上げてきたシベリウスだったが、この時期、かなりの生活苦に陥っていた。第一次世界大戦勃発により、契約していたドイツの出版社との関係が途絶え、収入が得られなくなってしまったためである。交響曲の筆を進めたいながらも、目下の収入を確保するため「現実的な仕事を片付けねばならない」と心中を吐露していたシベリウスだったが、1915年12月8日、彼の誕生日に開催された祝賀会には間に合った。初演は大成功で、聴衆も批評家も惜しめない賛辞を送ったが、シベリウス自身はそれに満足せず、その後1916年と1919年に改訂を施している。

本日演奏されるのはその最終稿となった1919年版である。初演時には4楽章形式だったが、改訂を重ね3楽章にまとまった。本作品の特徴的な管弦楽法の一つにメロディーラインの提示が挙げられよう。弦楽器のトレモロや、木管楽器が2オクターブの広い音域で奏でる旋律は非常にダイナミックで、耳に残りやすい。かと思いきや簡素なメロディーを、これまた平易な3度音程で重ねる箇所も多い。こうした両極端な旋律線が出現と消失を繰り返し、シベリウス特有のバランス感覚の中で自然なクライマックスを形成していく。

戦時下におけるナショナリズムの帰結として生まれた本日の三作品は、結果的に自然描写、あるいは自然の偉大さを想起させる曲想となっている。不穏な世界情勢のもと、才能に恵まれた作曲家たちが同じ地点に行き着いたことには奇妙な必然性が感じられる。実際、自然への畏敬はどの時代にも共通する普遍性であり、だからこそ今日の聴衆にも感銘を与えるのだろう。

(近藤 圭 元団員・思想家)

# ユーゲント・フィルハーモニカー

Jugend Philharmoniker (ユーゲント・フィルハーモニカー) は、一般財団法人日本青年館の音楽行事(全国高等学校選抜オーケストラフェスタ、全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユングオーケストラ・ヨーロッパ公演)に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設されたオーケストラである。全国各地の様々な高校や大学オーケストラ出身のプレイヤー約80名が集まり、東京を拠点として活動している。3月の定期演奏会を中心に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏、地方公演、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。音楽的に、そして人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること(≡プロオケには出来ないこと)」を追求している。



○ユーゲント・フィルハーモニカーでは学校・老人ホームなどの福祉施設や、その他各種イベントなどでの依頼演奏を受け付けています。詳しくは当団Webサイトをご覧ください。

## 今期の活動紹介

2018	
6.9	依頼演奏：デイホーム弦巻
6.12	依頼演奏：株式会社LIXIL支社業績表彰式
9.1	依頼演奏：ズーラシア動物園「ドリームナイト」
9.23	第2回福島公演(福島市音楽堂 大ホール) ショスタコーヴィチ：祝典序曲 ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 チャイコフスキー：交響曲第6番《悲愴》 指揮=安齋拓志　ピアノ=結城奈央　金管バンド=福島県立橘高等学校管弦楽部
11.24	室内楽演奏会(団内)(板橋区立グリーンホール 第1ホール)
12.15	依頼演奏：デイホーム弦巻
12.29	依頼演奏：第25回全国高等学校選抜オーケストラフェスタ OBOG オーケストラ ブラームス：交響曲第1番より第4楽章 指揮=安齋拓志
2019	
1.5-6	合宿(山中湖畔荘ホテル清溪)
3.17	第13回定期演奏会(杉並公会堂 大ホール)